

第 1 回 勉強会

日時 令和7年 2月17日(月)

15時00分~17時00分

場所 若狭三方縄文博物館・講座室

※入場無料 事前予約不要

(1) 湧水を用いた無施肥レンコン栽培:水質浄化と生物多様性保全

国立環境研究所 松崎慎一郎 室長

農地が広がる流域では、長年、施肥された窒素の余剰分が土壌や地下水に蓄積しており、レガシー窒素と呼ばれています。レガシー窒素が存在する限り、湖沼の水質が改善されることはありません。農業生産と環境保全をどのように両立すればよいでしょうか。本発表では、生態系の機能を活用した解決策



(Nature-based solutions)の事例を紹介します。千葉県のある圃場では、レガシー窒素が豊富に含まれる湧水を引き込み、無施肥・無農薬でハス(レンコン)を生産しています。このハス田が水質を浄化しているだけでなく、絶滅危惧種のミナミメダカとホトケドジョウ等が生息していることがわかりました。周辺の水田では、圃場整備によってコンクリート排水路が広がっていることが、このようなハス田が、生物多様性保全にも貢献できる可能性が考えられます。

(2) 田んぼで魚を飼うと米の収量が増える?「施肥効果」の検証

大妻女子大学 小関右介 准教授

近年、農薬や化学肥料に依存した集約的農業による農地生態系の劣化が指摘されるなか、生態系や生物多様性に配慮した持続可能な農法の取り組みが求められています。農薬や化学肥料の普及以前から営まれてきた伝統的農法のしくみの理解は、そうした持続可能な農法の開発や実践のためのヒントを与えてくれるかもしれません。本講演では、長野県佐久地方で今も行われている伝統的農法「稲田養魚」について演者らが行ってきた研究事例を紹介し、かつて「米魚両全」と評された稲田養魚の高い生産性を可能にする生態学的しくみについてお話しします。この研究事例を通して、時代に合わなくなった伝統的農法の今日的意義について考えてみたいと思います。

